英語科学習指導案

指導者　　松　村　　健

日　時　平成 24 年 12 月 1 日（土）　第２校時（11：05～11：55）

年　組　中学校第２学年２組　計 39 名（男子 19 名，女子 20 名）

場　所　中学校第２学年２組教室

単　元　状況に合った表現を使って書いてみよう

（Unit 6　The Story of an Old Clock　*NEW HORIZON English Course 2　東京書籍*）

単元について

本単元では，登場人物のブラウン先生がインターネットで旅行計画をしていたところ，「大きな古時計」という歌にゆかりのあるホテルのホームページに行き当たったことから，その歌の誕生エピソードを紹介する内容となっている。エピソードを表現するためには，事実を叙述したりさまざまな表現を織り交ぜたりする必要があり，それを満たすために本単元では there 構文と動名詞が導入されている。まず，there 構文について安井（1982）は「there は通例，談話の場面や新情報を担う要素として新しく導入する働きを持っている」と述べている。つまり，there 構文は不定冠詞の a を含む名詞が意味上の主語になることが多いということである。したがって，there 構文が単純な事物の存在を表すだけでなく新情報の導入や話のきっかけとして扱われることを学ぶことができる。そして，there 構文に付随する不定冠詞 a の機能についても学ぶことができる。次に，動名詞は名詞化した動詞を主語や目的語として用いることができる。これまでは to 不定詞を用いて動詞を名詞化していたため，enjoy などの動名詞を伴う動詞を表現活動で利用することができなかったが，本単元からは動名詞という点で制限されていた部分が少なくなる。また，‘I enjoyed soccer.’ が‘I enjoyed watching soccer.’のように「サッカーを楽しむ」から「サッカーを見ることを楽しむ」のように，どのように楽しむのかを表現できるようになる。以上の点から動名詞を用いることが表現の幅を広げることを可能にする。これらは，英語で情報を伝えたり考えや意図を伝えたりする言語活動（話すこと，書くこと）につながるものであり，生徒が自分で状況に合わせて既習事項とこれらの表現を取捨選択しながら言語活動に取り組み，よりよい表現を求めることができる単元である。

本学級の生徒は，落ち着いた雰囲気で学習に取り組むことができる。英語については，前向きに取り組む生徒が多く，７割の生徒が「英語が好きである」と４月に行ったアンケートに回答している。英語が好きな理由には，「外国人と会話ができると楽しいから」，「英語が ALT の先生に伝わったとき，うれしいから」などが挙げられており，英語を表現する楽しさを求めている生徒が多い。これらの生徒は表現する際には，状況によって様々な表現方法があることや英単語のコアな意味を知って，表現活動に活用したいと思っている。しかし中には単語や連語を覚えて公式のように使えることや穴埋め問題などのいわゆる練習問題が解けることで満足している生徒もいる。そういった生徒は表現や文法の使用場面について考え，その場面の状況や文法の用法をとらえることを苦手としている。

以上のことから，指導にあたっては，次のことを留意する。there 構文については，生徒が「存在を表す表現」としてのみとらえており，「机の上にそれがありました」を“There was it on the desk.”のように表現することが多いので，there 構文の機能について考える場面を設定する。考える場面においては，既習事項の冠詞に着目させ，不定冠詞と定冠詞の違いを確認する。そして，不定冠詞が新情報を導入する場面で使用されていることに気づかせ，there 構文が話のきっかけになっていることを理解させる。動名詞については，動名詞を含むエピソード文の内容を理解させる中で，動名詞が主語や目的語として使用されていることや動名詞を伴う enjoy などの動詞があることを確認する。以上の there 構文，動名詞について考えを深める場面では，冠詞や，動名詞の有無による意味の違いが分かるような例文を提示し，生徒の理

解が深まるように工夫するとともに，机間指導で支援の必要な生徒に対応する。そしてペアで意見交流の場面を設け，生徒誰もが新出文法の機能について十分考えられるように指導を工夫する。there 構文と動名詞の意味･形などの文法項目を理解させる練習としてパタンプラクティスやペアでの会話などを用いる。以上の学習活動を通して得た体系的な知識と既習事項を活用させて,「広島を紹介しよう」というテーマでエピソード文を書かせる。書かせる際には，エピソード文の特徴を把握させるとともに，新出文法が活用できるように指導を工夫する。書かせたエピソード文はグループで相互評価を行った後に清書させる。そして清書の内容で there 構文や動名詞の定着を測る。

指導目標

１．間違いを恐れずにエピソード文を書くようにする。
２．既習事項や there 構文，動名詞を用いてエピソード文を書くことができるようにする。
３．there 構文と動名詞の形・意味・機能を理解できるようにする。

指導計画

１．there 構文の形・意味・機能の理解　・・・・・・・・・３時間（本時はその２時間目）
２．動名詞の形・意味・機能の理解　・・・・・・・・・３時間
３．エピソード文の書き方の理解と下書き　・・・・・・・・・２時間
４．エピソード文の相互評価と清書　・・・・・・・・・２時間

本時の目標

新情報を導入する there 構文の機能を理解することができる。

「学びのつながり」の視点

Warm-up では，小学校の英語活動のように口頭で既習事項について練習させ，その後 topic を与え，既習事項を活用する会話場面を設定する。その中で体系的な文法知識と言語の使用場面を考えさせ，表現を取捨選択させる。there 構文の導入においては，意味上の主語に不定冠詞の a を伴っていることに着目させることで，既習事項でありながら，その機能がとらえにくい冠詞についての理解を深める。そして英文を通して，there 構文が不定冠詞を伴う理由について考えさせることで既習事項と未習事項をつなげる。このように既習事項を体系的に理解することにより，未習事項の理解が深まり，表現活動に活かすことができることが「生活的概念」と「科学的概念」の「のぼりおり」であると考える。

学習の展開

学習活動と内容	指導上の留意点　（◆評価）
１．Warm-up　（10 分） □Rhyming の要素を取り入れた phonics を用いて英文の発音練習をする。 □既習事項を含む英文の音読練習をする。 ・個人で１分間練習 ・ペアで１分間日本語を英語にする練習 ・ペアで One minute talk	○韻を踏んでいることに気づかせるために，繰り返し音読練習をし，文字と音のつながりを把握できるように指導する。 ○既習事項の定着を図るために，繰り返し音読練習するように促す。 ○会話を継続するために，質問や意見を述べるように促す。

Topic: Are there any interesting places in Hiroshima? ・授業者が２名生徒と Topic について会話する。	○会話の際に，eye-contact や gesture などを活用するように促す。 ○授業者が話しやすい雰囲気をつくる。
２．Review　（10 分） □英文を聞き，質問に答える。	○One minute talk と前時の内容を利用した英文を聞かせ，there 構文に着目させられるような質問をする。
□there 構文の形・意味を確認する。	○英文に対する質問と答えを活用して視覚的に there 構文が確認できるようにするともに，音読練習をし，音声の確認も行う。
３．Comprehension　（25 分） □エピソードが書かれた英文を読み，質問に日本語で答える。	○エピソードに書かれた内容に関する質問を通して，エピソードの概要が把握できるようにする。 ○生徒の読解の様子を把握し，支援するために机間指導をする。
□エピソード文を音読練習する。	○新出語や there 構文の音読ができているのかを確認し，必要があれば繰り返し音読練習するように指導する。
□there 構文について考える。 「なぜ there 構文が使われているのだろう。」	○「存在を表すから」などの答えが予想されるので他にも存在を表す表現があることを伝え，敢えて there 構文が使われていることに注目できるようにする。
□エピソード中にある不定冠詞と定冠詞の意味の違いを考える。 「She threw <u>an apple</u> to us. I give <u>the apple</u> back to her.で下線部の違いは何ですか」	○冠詞に着目することで there 構文に付随する不定冠詞と関連していることが気づけるようにする。 ○不定冠詞が初出の語を伴うことに気づかせるために，定冠詞を含む文と比較する。
□there 構文について考える質問をする。 「there 構文はこの話の中でどのような働きをしていると思いますか。」	○机間巡視をし，全体で交流すると理解が深まる答えを書いている生徒に発表するように促す。 ◆there 構文の機能を理解することができる。 **【言語・文化に関する知識・理解】**
４．Consolidation　（５分） □there 構文を含む英文を書く。	○２～３文書くように指示する。

参考文献

安井稔　『［例解］現代英文法事典』　大修館書店　1982.

AJ トムソン／AV マーティネット　『実例英文法』　オックスフォード大学出版局　1988.